

第4章 他の事例に関する調査

他自治体の観光案内板等の設置及び改廃において、観光客の回遊ルートの把握等、本業務に類似した観光客の動態調査の事例について調査した。

関連資料を収集するとともに、収集した事例をカルテ形式で取りまとめ、知見を集約した。対象事例は下記5事例とした。

表 4-1-1 事例一覧

No.	自治体	取組み名称	年・年度	主たる対象エリア【対象】
1	愛媛県松山市	まつやま道しるべマップ	平成23年度?	主要な拠点、経路、観光地 【案内板、解説板、まつやまインフォメーション、案内サイン】 ※市全域
2	沖縄県うるま市	勝連城跡周辺回遊観光整備基本計画	平成27年3月	勝連城跡周辺エリア 【回遊路・地域資源・観光サイン・休憩施設等の整備及び周辺回遊計画】
3	北海道函館市	函館市歩行者用案内標識整備計画書	平成22年2月	観光エリア（西部・五稜郭・湯川） 【案内サイン】
4	山梨県笛吹市	笛吹市サイン計画	平成25年6月	市内全域 【誘導サイン・案内サイン・解説サイン】
5	千葉県香取市（旧佐原市）	佐原市 回遊性サイン計画	平成9年	香取市（佐原地区） 【誘導標識・案内標識】

表 4-1-2 回遊促進による地域活性化に資する案内誘導サイン整備事例（整理フォーム案）

項目	内容（下記に基づいて整理）
対象地域	・自治体名、対象エリア等
名称	・プロジェクト、検討報告書、協議会等の名称。なければ「〇〇の〇〇を目指した観光案内サインシステムの整備」等、取組みの概要がわかるタイトルを付与
年・年度	・報告書、整備計画等のとりまとめ年月、整備事業の実施年度等を記載
検討組織	・検討委員会、協議会等を開催した場合の名称、座長、委員構成等を記載
取組みの背景等	・取組みに至った背景（発生していた問題・課題等）を整理
取組概要	<ul style="list-style-type: none"> ・案内誘導のコンセプト、サインのデザイン、サインの配置等の概要を整理 ・案内誘導経路図や写真等があれば挿入
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・当該取組みのキーポイントとなる点について、次の視点を中心に概要を整理 ①エリア内の回遊を誘発・促進するしくみ、アイデア等 ②回遊を飲食や購買につなげるしくみ、アイデア等 ③案内誘導サインの設置や維持管理に関するルール（設置に係る役割分担、汚損・破損・改善要望等があった場合の対応ルール等）
整備効果	<ul style="list-style-type: none"> ・整備効果に関する検証が行われていれば、その概要を簡潔に整理 ①観光客等利用者に対する効果（利便性の向上、入込客数の拡大等） ②地域に対する効果（飲食やみやげ品等の販売額の増加、認知度の向上等） ③行政側の効果（維持管理コストの削減、案内業務の簡素化等）
出典等	・出典名、HPアドレス、担当科部署名等を記載

表 4-1-3 回遊促進による地域活性化に資する案内誘導サイン整備事例（その1）

項目	内容
対象地域	愛媛県松山市
名称	『まつやま道しるべマップ』（取組名）
年・年度	平成12年度に案内標識の基本計画を策定、平成15年度までに「まつやま道しるべマップ」の整備を完了
検討組織	まつやま道しるべマップ標識検討協議会
取組みの背景等	<ul style="list-style-type: none"> 案内・誘導サインが未整備であったり不足していたため、目的地への誘導機能が不足していたほか、サインの統一性も見られない状態であった。 こうした問題に対応するため、『日本一迷子にならないまち松山』をコンセプトとする取組みを開始した。
取組概要	<ul style="list-style-type: none"> コンセプトに対応する基本方針は次のとおり。 <ol style="list-style-type: none"> まちの構造を分かりやすく伝え、秩序ある情報を提供 形状・大きさ・色・配置によって単純明快な表現を導入 景観と調和した都市環境、心理的に安らぎやまちづくりへの愛着を感じることが出来る『そのまちらしさ』をつくりだすことに配慮 案内標識を整備すべき拠点、経路、地区を次の基準に従って設定。 <ul style="list-style-type: none"> ○整備拠点：松山空港、松山観光港、JR松山駅、松山市駅、松山IC、道の駅（風和里）、松山市一番町駐車場、松山市道後温泉駐車場 ○移動経路：松山歴史文化道、ガソリンスタンド（以上、自動車動線）、四国のみち（へんろ道）、公共交通機関（以上、歩行者動線） ○整備地区：中心部、道後、三津浜・梅津寺、久谷・砥部地区（松山市『坂の上の雲』まちづくりフィールドミュージアム構想のセンター及びサブセンターゾーン） 段階的な案内誘導のため、A型（広域案内板）、B型（地区情報案内板）、C型（誘導案内板）の3種類のサインを適宜設置。 <div style="text-align: center;"> <p>A型サイン B型サイン C型サイン</p> </div>
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> 掲載情報の選定に当たり、アンケート等の結果から、①多くの利用者がある交通施設、②利用者の多い公共施設、③利用の多い観光施設（歴史・文化施設）、④本市を代表する商業地、⑤観光案内所、⑥トイレ、を誘導目的地として設定した。 観光施設の抽出に際しては、パンフレットやガイドマップ、旅行雑誌等に掲載されているものをリストに整理し、優先順位を設定した。 域内のルートを3種類（主導線、回遊ルート、誘導ルート）に分類して案内標識（案内板、解説板、『まつやまインフォメーション』等）による情報提供を実施した。 QRコードによるWebサイトへのリンクや施設解説の整備。マップコードによる位置情報の提供を行った。
整備効果	<ul style="list-style-type: none"> 情報提供全体の効果は計測していないが、「まつやまインフォメーション」の利用者数は毎月増加している。
出典等	松山市ホームページ、国土交通省作成資料（取組事例）
本事例の選定理由	観光客の移動支援に資する情報マネジメントに関するヒント集として活用

表 4-1-4 回遊促進による地域活性化に資する案内誘導サイン整備事例（その2）


項目	内容
対象地域	沖縄県うるま市
名称	勝連城跡周辺回遊観光整備基本計画
年・年度	平成 26 年度
検討組織	勝連城跡周辺回遊観光整備基本計画策定委員会（庁内組織：委員会＝課長級、幹事会＝係長級）
取組みの背景等	<ul style="list-style-type: none"> ・勝連城跡は、昭和 47 年（1972 年）に国指定史跡に認定され、平成 12 年（2000 年）に「琉球王国のグスク及び関連遺跡群」の一つとして、首里城跡などとともにユネスコの世界遺産に登録され、昭和 52 年度より保全修理整備事業による城郭内の整備が行われ、城壁の石積み等の整備が進められている。 ・その一方、南風原地区は回遊観光のポテンシャルが高いが、サイン整備などで観光客に歴史的背景や魅力を伝える手段が不足していた。 ・こうしたことから、勝連城跡を訪れる観光客は、滞在時間が 1 時間と短く、観光客の消費は少なく、勝連城跡周辺には商業施設や店舗などの消費活動を促すスポットも少ないため、城跡見学が終わるとすぐ別の場所に移動している状況であった。
取組概要	<ul style="list-style-type: none"> ・「観る」が主になっている観光を解決するために、「体験（食べる、歩く、学ぶ、創る、触れる）」を導入して、勝連城跡を訪れる観光客に「楽しんで」もらい、滞在時間を延ばし、観光客の消費の拡大につなげる。これらの観光客が「楽しむ」、「滞在時間の延長」、「消費の拡大」をすることが、回遊観光を創出する意義。 ・本計画は、世界遺産である「勝連城跡」周辺の歴史・文化的資源を活かした回遊路の創出を目指し、良好な地域景観に寄与する回遊路・地域資源・観光サイン・休憩施設等の整備及び周辺回遊計画の検討を行った。 ・勝連城跡周辺の回遊観光の目指すべき姿を、自然や景観、歴史・文化など地域全体を楽しむことができる『屋根のない博物館』としての整備を目指した。 ・観光振興を図っていくための回遊ルートの設定や、整備計画等を導いた。 <div style="text-align: right;">  <p>サイン整備イメージ</p> </div>
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・回遊モデルコースを設定した。 （①勝連城跡から歴史を感じるルート、②集落内の歴史・文化を感じるルート、③ユビダグー周辺の自然を体感するルート） ・重点資源の設定ルールを設定した。 （①勝連南風原地域の歴史・文化を知る上で重要な位置づけがあること、①既存のまち歩きルートで位置づけられていること、③観光客と地域住民との交流や地域住民が管理しやすい環境であること）
整備効果	<ul style="list-style-type: none"> ・具体のサイン整備は平成 29 年度からとなっており、現時点では整備効果については把握されていない。 ・本計画における目標指標は「勝連南風原地区内を回遊する観光客数」と設定され、駐車場、回遊路、地域資源など関連整備を合わせた事業の複合効果として、平成 33 年までの短期で 3 万人、それ以降の中長期の目標を 6 万人に設定している。
出典等	勝連城跡周辺回遊観光整備基本計画（平成 27 年 3 月）
本事例の選定理由	観光客の移動支援に資する情報マネジメントに関するヒント集として活用可能。

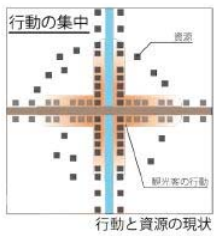
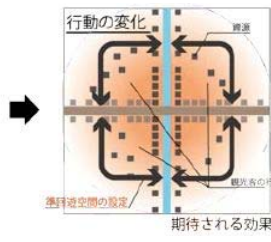
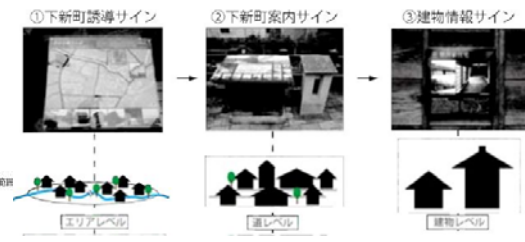
表 4-1-5 回遊促進による地域活性化に資する案内誘導サイン整備事例（その3）

項目	内容
対象地域	北海道函館市
名称	函館市歩行者用案内標識整備計画書
年・年度	平成 21 年度
検討組織	函館市歩行者用案内標識整備協議会（整備完了に伴い現在は解散）
取組みの背景等	<ul style="list-style-type: none"> ・函館市は年間約 500 万人の観光客が訪れる全国屈指の観光都市であり、近年は、台湾・韓国などのアジア諸国からの外国人観光客の増加や、団体観光から個人型観光に変化しており、多様化した観光客のニーズに対応した環境の整備が必要となっていた。 ・函館観光は徒歩で移動しながら観光スポットを巡ることが多く、地理に不案内な観光客が安心して歩くことができる道路環境を創出する必要があったことから、多言語表記、バリアフリー、ユニバーサルデザインを取り入れた歩行者用の標識の整備を進めるため、各道路管理者や観光関連部局・団体との連携のもとに、利用者の視点に立った検討を行うことを目的とし、関係機関による協議会を設立した上で検討を行った。
取組概要	<p><配置計画の考え方></p> <ul style="list-style-type: none"> ・標識は対象となる地区（西部・五稜郭・湯川）のそれぞれの歩行者の導線を考察し、地図および誘導標識を効率的に配置する。 ・地図標識は、主要な交通拠点施設（駅、路面電車電停など）、交差点、施設などに主に配置し、これらの施設を結ぶ歩行者導線上には誘導標識を配置して連続性を確保する。 <p><既存の案内標識との関係></p> <ul style="list-style-type: none"> ・西部地区に多い既存の歩行者用の案内標識との調整を図りながら配置を検討する。 ・案内標識の乱立の防止（既存標識との重複防止）を図る。 ・新設すべき場所に既存の老朽化した標識がある場合は撤去を検討するほか、既存標識の支柱などが利用可能な場合は、案内パネルの交換などのリニューアルも検討する。 <div data-bbox="296 1070 1321 1384"> </div> <p>設置例（赤レンガ倉庫群） 表示面例（同左） 凡例拡大見本</p>
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・函館市の特性を踏まえ、歩行者に重点を置いた案内サイン計画を検討した。 ・近年の観光動向を踏まえ、多言語表記、バリアフリー、ユニバーサルデザインといった各要素を積極的に採り入れたプランとした。 ・案内標識の乱立の防止（既存標識との重複防止）に配慮した。
整備効果	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 24 年度にアンケートを実施（来函観光客 200 人、外国人観光客 206 人）。 ・日本語および外国語とも肯定的な回答が多く利用者には好評を得ているとの結果。 ・視認性については、日本人観光客の約 7 割が「発見しやすい」と回答、標識のデザイン性については 8 割が「周囲の景観に馴染んでいて良い」と回答、字の大きさについては約 7 割が「適当」と回答、案内標識の必要性については、9 割以上が「必要」と回答。 ・外国人観光客からも「視認性」「デザイン性」「検索性」「表現性」「必要性」で高い評価。 ・コンビニなど一部のピクトグラムについて外国人が理解しにくい点が今後の改善課題。
出典等	函館市歩行者用案内標識整備計画書（平成 22 年 2 月）、函館市ホームページ等
本事例の選定理由	今後作成予定の『トータルサインプラン』の検討に際し活用可能な知見を多く含む。

表 4-1-6 回遊促進による地域活性化に資する案内誘導サイン整備事例（その4）

項目	内容
対象地域	山梨県笛吹市
名称	笛吹市サイン計画
年・年度	平成 25 年 6 月（平成 24 年 7 月～平成 25 年 6 月までの 1 年間）
検討組織	笛吹市サイン計画策定委員会（委員長：山梨大学大学院 大山勲教授） （策定委員会 3 回、市民ワークショップ 3 回、庁内検討委員会 5 回開催）
取組みの背景等	<p>・ 笛吹市は、桃・ぶどうの作付面積日本一の果実郷であり、四季折々の美しい風景、温泉資源や歴史遺産など、魅力あふれる観光と文化のまちであるが、観光客等を案内するための案内看板類（公共サイン）が十分整備されていなかった。</p> <p>（主な問題点）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 合併以前の各町村の多様なサイン類が競うように混在 ・ デザインや配置に統一性がなく、旧町村名のものも散見 ・ 老朽化したサインが撤去されずに放置されていたり、新旧サインの併設もあり ・ 目的地への案内がわかりづらい、必要な場所にサインがない 等
取組概要	<p>→「盆地景観」による印象把握とアクセスルートのパターン化</p> <p>→回遊式庭園に範を得た案内システムの構築</p> <p>→階層的案内システムを構築し、案内の最小単位（目的地）の選定に留意</p>
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 笛吹市サイン計画における案内システム（サインシステム）は、回遊式庭園のように目的地（案内エリア）を有機的に繋ぎ合わせることで、相互の連携を高め、笛吹市を一体的に認識できるようにした。 ・ 案内エリア内の情報を配信する拠点（ふえふき情報スポット）を設けることにより、サイン類の乱立を防ぐとともに、訪れた人にわかりやすい情報提供を行うこととした。 ・ サインの設置・撤去に関する方針を明文化した。
整備効果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 26 年度に実施計画策定、27 年度以降に年次計画に従って具体的なサイン整備を行うこととされており、整備効果はまだ把握されていない。 ・ H28 年度は計画 5 基中 4 基設置完了。H29 年度は情報スポット 1 基、ウエルカム広場サイン 3 基を設置予定。
出典等	<p>笛吹市サイン計画（平成 25 年 6 月）</p> <p>笛吹市実施事務事業マネジメントシート（H27・28 年度分）</p>
本事例の選定理由	<p>今後作成予定の『トータルサインプラン』の検討に際し活用可能な知見を多く含む。</p>

表 4-1-7 回遊促進による地域活性化に資する案内誘導サイン整備事例（その5）

項目	内容																					
対象地域	千葉県香取市（旧佐原市エリア）																					
名称	佐原市回遊性サイン計画																					
年・年度	平成9～10年度																					
検討組織	東京大学大学院工学系研究科（地域デザイン研究室）所属の学生らによる研究																					
取組みの背景等	<ul style="list-style-type: none"> 香取市佐原地区には、伊能忠敬旧宅（寛政5年(1793)建築・国指定史跡）のほか、県指定文化財も8件（13棟）が小野川沿いや香取街道沿いに軒を連ね、国の「重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）」に指定されているが、観光客の行動はこの重伝建地区内に留まっており、さらなるにぎわい創出のためには、回遊行動を重伝建地区周辺に広げていく必要があった。 																					
取組概要	<ul style="list-style-type: none"> まず、重伝建地区の町並みの周辺へ人々の回遊行動を促す理論について考察し、結節点に注目した「段階的回遊戦略」を提案し、その中でもキーとなる「準回遊空間」の存在と概念を整理した。 現状のサイン計画は回遊性のための適切な情報提供ではなく、伝建地区中心部の比較的狭い範囲を対象とした、「誘導型のサイン計画」となっていると分析。改善策として準回遊空間における「回遊性サイン計画」を提示。また、回遊型サインの6要素として、①歩行速度を低下させる、②安心して迷える、③安心して曲がれる、④発見感・期待感を与える、⑤地域性・場所性を重視する、⑥サインを通じ住民と観光客との交流が生まれる（サインの維持管理に住民も参加するような意識の醸成につなげる）を提唱。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>行動と資源の現状</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>期待される効果</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>実験で設置した3段階のサイン</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">行動を促す方法のイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> 上記コンセプトにもとづき、平成22年に社会実験を実施。小野川沿いから下新町方向へ足を運んでもらうため、場所に応じてサインの内容を変化させ段階的な誘導を試みる案内サインを設置し、歩行者数の変化やサインの認知状況などを調査した。 																					
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> 重伝建地区はあまりに回遊性が高いため、そのエリアから周辺エリアに出るときには、観光客にとって心理的なバリアーが働くと仮定。 そのバリアーを最小限にするため、いわば緩衝帯に当たる「準回遊空間」を経て周辺エリア（佐原の場合、路地裏）へ至るルートへ誘導する「段階的回遊戦略」を提案。 																					
整備効果	<ul style="list-style-type: none"> サイン設置前後の差はほとんどみられなかったが、忠敬橋から最も遠い「ぶれきめら休憩所」付近では、わずかに歩行者数の減少抑制効果（回遊を諦めて引き返す人を少なくする効果）がみられた。 サイン周囲により目立つものが多いとサインの設置効果が低い。 <div style="text-align: right;"> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <caption>忠敬橋付近の歩行者数を100とした時の減少率</caption> <thead> <tr> <th>場所</th> <th>サインなし (%)</th> <th>サインあり (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>忠敬橋付近</td> <td>100</td> <td>100</td> </tr> <tr> <td>橋付近</td> <td>32</td> <td>18</td> </tr> <tr> <td>じゃしじゃー</td> <td>11</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>カザアルペラータ付近</td> <td>11</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>休憩所付近</td> <td>11</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>ぶれきめら</td> <td>4.6</td> <td>4.6</td> </tr> </tbody> </table> </div>	場所	サインなし (%)	サインあり (%)	忠敬橋付近	100	100	橋付近	32	18	じゃしじゃー	11	11	カザアルペラータ付近	11	11	休憩所付近	11	11	ぶれきめら	4.6	4.6
場所	サインなし (%)	サインあり (%)																				
忠敬橋付近	100	100																				
橋付近	32	18																				
じゃしじゃー	11	11																				
カザアルペラータ付近	11	11																				
休憩所付近	11	11																				
ぶれきめら	4.6	4.6																				
出典等	日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）2010年9月及び、同（関東）2011年8月																					
本事例の選定理由	『観光客の移動支援に資する情報マネジメントに関するヒント集』に掲載され、研究テーマとして活用されていることから、案内誘導理論の参考として活用可能と判断。																					